

10. 10	9:00	Nanjing Normal University
	9:30	Memorial Service
	12:00	Lunch
	2:00	Program evaluation and integration
	5:00	Banquet
	7:00	End of day 4

\*①②③④HWH program -Healing the Wounds of History method was developed by Armand Volkas, a son of holocaust survivors, for the purpose of education and reconciliation between cultures in conflict. HWH program will take a closed group format.

Participating Organizations:

Ritsumeikan University Department of Applied Human Science

Nanjing Normal University Department of Education Science,

Nanjing Normal University Research Center for the Nanjing Massacre

California Institute of Integral Studies East West Psychology Program

Researchers:

Ritsumeikan University – Kuniko Muramoto,Ph.D.

Nanjing Normal University – Lianhong Zhang, Hu Hong

California Institute of Integral Studies – Aramnd Volkas,M.A. Aya Kasai,M.A.

---

## 2 〈10月7日午前〉報告

---

### 1 村本邦子

大家好。我叫村本邦子。感到我很高兴。皆さま、こんにちは。これから国際セミナー南京を思い起こす 2009 年を始めたいと思います。今日こんな形で私たちを迎えてくださった張連紅先生、趙夏鳴先生、アメリカから来てくださったアルマンド・ボルカス先生、それからここに集まってくださった皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。二年前にこちらに来て、皆さまに暖かく迎えて頂き、中国の皆さまが日本の学生たちとの交流を望んでいることを知り、大変あ

りがたく、このたびこうして実現することができて本当に嬉しいです。

二年前の体験は私たちにとって、本当に良い体験でした。とても辛い体験でしたが、同時に、とても良い体験でした。加害者側にいる日本人が、自分の国のなかで、自分たちで考えたり反省したり苦しんでいても先に進めないものが、この地に受け入れられ、中国の皆さま方と一緒に過ごすことで越えて行ける感覚がありました。

事前に資料を見て頂きましたが、私は20年ほど臨床心理士として女性や子どものカウンセリングをしてきました。とくに、虐待や性暴力など現代の暴力の問題に関わってきましたが、関われば関わるほど、その背後に過去の戦争の影響を感じてきました。つまり暴力の世代間連鎖ですが、現代の家族の前の世代、それからもう一つ前の世代に遡ると、背景に戦争があり、被害という側面もそうですが、とくに戦争加害という側面において、未清算のものが世代を超えて現代のさまざまな問題に繋がっているということを感じます。

連鎖の仕方には大きく2つのパターンがあります。一つは、再演とか再現と言いますが、戦争から帰ってきた人たちが家庭の中で暴力をふるい、その暴力が引き継がれていくパターン。もう一つは、人間の想像力を超える残酷さを経験した人々に起こる感覚麻痺によって、感情的な交流を家族と持つことが出来ず、感覚麻痺が連鎖していくというパターン。現代の日本社会に見られる暴力、性暴力や、若い人たちの間に見られる手首を切ったり薬をたくさん飲んだりという自傷行為をしなければ生きている実感が得られないという感覚麻痺の問題は、過去の戦争のトラウマが影響していると思います。

過去の罪を清算し、それを越えていくために私たちがしなければならないことは山ほどありますが、とくに臨床心理学的な観点から、国際的にもさまざまな取り組みが試されているなかでも、アルマンド先生のHWHの手法が素晴らしく、南京の地でアルマンド先生にも手助け頂いて、中国の皆様と体験を一緒に分かち合えたらと考え、今



罗萃萃 氏(左) 村本 邦子 氏(右)

回、このような企画になりました。皆さまと四日間を一緒に過ごして、どんなところまで行けるのかとても楽しみにしています。

## 2 張連紅

尊敬する村本先生、尊敬するアルマンド先生、尊敬する笠井先生、また日本からおいでになった日本の学生の皆さん、皆さんは本当に素晴らしい時期に南京においでになりました。南京は仲秋、満月の日を迎えたばかりです。10月は中国、とくに南京にとって、本当に素晴らしい金色の季節です。2007年11月に皆さんが初めて南京に来られ、その時に、これからまた一緒に話し合おうという約束をしました。二年後の今、中国は旧暦の8月十五夜、団欒の日です。皆さんはそういう団欒の日にこちらに来られました。これはまるで運命のようなことです。主催者の一つの南京師範大学として、私は本当に心から皆さんのご光来を熱烈に歓迎いたします。

初めて南京に来られた方がおられると思いますので、南京師範大学について少しご紹介させていただきます。我校は107年の歴史を持っています。今は総合大学です。在学生は3万以上おります。中国では1000以上の大学がありますが、中国での大学のランキングは50位くらいです。キャンパスは3つあります。このキャンパスは1919年に造られました。ですから、90年以上の歴史があります。このキャンパスは最初のデザインで、アメリカの設計士と中国の設計士が2人でデザインして造ったものです。ですから、2009年、ここでHWHというシンポジウムをすることはとても意義のあることだと思っております。なぜかというと72年前、すなわち1937年、このキャンパスは難民、とくに女性難民の避難収容所として使われていたからです。当時、この大学はキリスト教のミッションスクール、女子金陵大学でした。ここで一番暗い時期に1万人以上の女性を収容保護していたのです。その時のこの難民キャンプの責任者は、アメリカ人のミニー・ヴォートリンという宣教師の女性でした。彼女は、ある手法を使って悲しみ失望する中国人女性たちを心理的にケアしました。当時彼女が使った手法は宗教を通じた手法でした。今日はこれからアルマンド先生のHWHという手法を使ってケアしていくというセミナーを開きます。心理的な方法であろうと、宗教的な方法であろうと、戦争による暴力を受けた人々をケ

アする目的は一つです。心理的な行動を通して人々を慰めていこうという目的です。人々がいかに災難に向かって将来に向かっていくかについて、ここで研究し報告しあいます。

今回のこのセミナーで、村本先生は心理的な立場から研究をされていくと思うのですが、私は歴史的な立場からこの問題について研究していきたいと思っております。一つは72年前に起こった悲劇が人々に与えたものは物質的なものだけではなくて、人間の命、とくに精神的な命にショックを与えたと思います。そういう意味でも、南京大虐殺では本当に多くの人の命が奪われてしまいました。その中には、性暴力被害を受けた多くの女性たちも含まれています。生命を失うことや心身の被害に関しては、学問としての歴史上ではあまりしっかりと残されていないと思います。しかし中日両国の人々の精神に残った傷や痛みは、時間がたってもなお消えておらず、むしろ更に強くなってきているように思います。村本先生の論文の中にそのような内容の一節があり、私はとても共感しております。戦争によって一度発生した暴力は、その影響が後々まで連鎖して続くということです。両国の政治の中にも戦争による暴力の連鎖は見られますし、両国の国民の生活の中にも深く残っています。例えば、中日のスポーツの試合を鑑賞する時など、普通の中国人の感想を通してそのように感じる場合があります。またデパートなどで普通の中国人消費者の気持ちを聞く時にもそのように感じる場合があります。このように、日常生活の中から一人一人に残った心の傷跡をうかがい知ることが出来ます。毎年行われている両国の国民に対する国民感情アンケートからもうかがい知ることが出来ます。中日両国の国民感情の中に、70年前に起こった戦争の影響が深く深く残っているということが国民感情アンケートから分かります。

私が言いたいことは2つあります。昔の戦争が残した悲劇のことを忘れることはできません。ヨーロッパと異なり、アジアでは、第二次世界大戦が終わった後も冷戦が続きました。第二次世界大戦後、中国で行われた教育は蒋介石の強化教育です。強化教育とは蒋介石の主張したもので「徳をもって恨みを返す(以德報怨)」というものです。新中国が成立してから大体同じような教育政策を採っています。戦争の罪悪は軍隊によるものであるとして、普通の日本人と軍隊とを区別しました。戦争の罪悪は日本の軍隊によるものであって、普通

の日本国民によるものではないという教育をしていました。1949年以降は、台湾であれ、大陸であれ、みな同じように、日本と友好関係を持ち協力してこうという政策を取っています。戦争によって廃土と化した国を再建するために、平和を目指し経済発展を目指すという道を歩んでいます。つまり、戦後50年来、中国では戦争を忘れようという政策を採ってきたのです。私は日本でも同じ政策がとられているように思います。暴力を行い、戦争の罪を犯した昔の軍人たちもなるべく戦争のことを忘れようとしているのではないかと思います。また、一部の兵士と一部の学者が歴史を改ざんしようとしています。80年代以降、冷戦が終わってから、中国でも日本でも、昔のことであっても、何とかこの戦争を思い出そうとしています。中国の国民は戦争による精神的な傷を治療したり、ケアすることを今までしたことがありません。村本先生のお話にもありましたが、日本でも戦争によって受けた精神的な傷をみんな別の形で顕しているということです。

次に私が話したいことは、これからどのような方法で戦争によって受けた傷を治していけばよいのかということです。実際には戦争が終わってから、皆それぞれに異なった独自の方法で戦争の傷跡を治しているのです。中国の幸存者の方や被害者の方も、みんな一生懸命、戦争によって受けた傷を自分自身で癒そうとしています。政治家の間でも様々な手法、例えば交流や新しい協力項目などを使って戦争による傷を治そうという試みがあります。中日両国の歴史学者の人たちも様々な歴史資料を収集して、歴史の真相を明らかにしようとしています。歴史の真相を明らかにすることも、戦争がもたらした傷を癒すことの一つではないかと考えています。今日こちらにおいてになった心理学者の皆さんは、心理療法の立場からどのようにすれば戦争の傷を癒せるかということの研究するために来られました。ヨーロッパでは戦争が終わってから、ヨーロッパとドイツの間で心理療法を使った試みをやっています。とくに、戦争当時のドイツ人の次世代が先代の戦争の罪を明らかにし、先代たちの戦争責任を問うということで、戦争がもたらした傷を癒そうとしています。ドイツでは反省し、罪を追及することを、国民運動のような形で国民全体で行っています。戦争当時のドイツ人の次世代の人々と、戦争当時の被害者の人々とが一緒に戦争責任を追及していました。ドイツでは心理学者たちが戦争当時のユダヤ人の

次世代の心理調査と、またナチスの子孫たちの心理調査をずっと続けていると思います。しかし、アジアでは国民全体で歴史の傷を治す試みは今始まったばかりです。中国では生存者の皆さんの心理的なケアは、今はまったく空白な状態です。今はまだ物質的な支援・援助の段階にあります。

2007年から今日のようなシンポジウムを期待していました。HWHというような手法で心理ケアする研究プロジェクトに期待をしています。多くの若者の皆さんにもこの研究に参加してもらいたいと期待しております。この4日間を通じてアルマンド教授の指導のもとに、私たちが戦争による精神的な傷を治療しケアすることについて、よりよい方法を見出せることを希望しております。



張連紅 氏

もう一つ期待していることは、このプロジェクトに参加して下さっている参加者の皆さんが、この会議での成果を生かして今後更に良い方法を見出せるよう研究していかれることです。中日戦争がもたらした傷を治療できるように皆で貢献出来ることを期待しております。

### 3 趙夏鳴

新しい視点、心理学的な視点から戦争の傷痕をケアするそういうシンポジウムに参加できることを心から嬉しく思います。2年前のプロジェクトにも参加しましたが、本当に印象深かったです。私も1937年の歴史を研究していました。しかし、今私がおっと関心を持っていることは両国の未来のことについてです。私は国際関係を専門としています。両国の関係は政治的な関係だけではなく、一番大切なものは国民間のことです。すなわち、あなたと私の関係のことなのです。ですから、国民間の関係と未来の世界平和のために、このプロジェクトはとても大切だと思います。本当に心から村本先生、笠井先生、またアルマンド先生に感謝しております。このプロジェクトのために、皆さん本当に熱心に努力して下さり、ありがとうございます。この3人の先生方が心理療法

という新しい視点から戦争の傷を治していかれるということを非常に素晴らしく思い、感謝したいと思います。この4日間のプロジェクトが円満に成功裏に終了することを心から祈っております。

#### 4 アルマンド・ボルカス

---

皆さんが心を開いて私をこの場に受け入れてくださり、新しい手法で歴史のテーマに取り組んでいこうということを受け入れてくださっていることに、とても感謝しています。私は外部者として、今日はここにおります。皆さん一人ひとりに私は大変共感しておりますが、私は日本人でも中国人でもない中立的な外部者として、ここにいさせていただいているということをととても強く感じます。

私のワークについて少しお話をしますが、そのお話をするためには私自身のことについて少しお話をしなければなりません。1995年にアウシュビッツを訪ねました。私の両親はそこに収容されていました。私の父はスペイン革命で、フランコ将軍を中心とした右派の反乱軍に対抗する勢力として戦っていたこともありました。その後、父は、赤軍のパラシュート部隊としてロシアで抵抗運動をする活動家としても活動しました。その後、アウシュビッツに収容されましたが、その中でもやはり抵抗運動を行いました。私の母はフランス抵抗政府の一人として活動していました。その後、母は、拷問や尋問を受け、アウシュビッツのブロック10という人体実験を行うことで有名なところで、人を不妊にする実験をするところに送られました。私の父と母はアウシュビッツで出会いました。父はガス室に送られる人たちの持ち物を処理する部署にいて、母が靴を必要としていることを聞いて、命をかけて靴を彼女に届けるということをしました。そうして、母と出会いました。1995年にアウシュビッツを訪ねた時、ガス室や焼き場などを見学して回ったのですが、その後、広場になっているところに出て、そこがすごく美しい野草の咲く野原になっていたことにとても感動しました。戦争も後半になると、ナチスは負けることはわかっていたのですが、それでも出来るだけ多くのユダヤ人を殺すということをととても重要な使命として、何千人ものユダヤ人がアウシュビッツに送られ殺害されました。その数は死体の処理が追いつかないほど多かったので、何週間も何週間も死体を

山にして焼いていました。そのようにして焼いた後の灰をその辺りに撒き散らしていたのです。私はその野原を見て、自然が恐ろしい歴史をこんなに美しく変容させることが出来たことに、とても感銘を受けました。この自然の中にある恐ろしいものを美しいものに変容させる力というのを私は信じていて、それがベースになって私のワークは生まれました。

文化間の対立や集団のトラウマを解決するために、実際、どのような方法を使うのかということについて少しお話しします。HWHは、ドラマセラピーや表現アートセラピーの手法を使って文化的な対立や集団のトラウマを癒すために生まれました。私は心理療法家であり、ドラマセラピストであり、演劇ディレクターでもあります。ここにおられるほとんどの方はこういった手法を体験されたことがないのではないかと思います。この方法を強要するつもりはありませんので、やりたくないことはやらなくても良いし、皆さんがやり易いように優しく進めていくことが出来れば良いなと思っています。今までいろんな国や文化を扱ってきました。ユダヤ人とドイツ人、パレスチナ人とイスラエル人、アルメニア人とトルコ人でアルメニア人大虐殺のテーマを扱ったこともあります。最近では1936年に起こったスペイン内戦のテーマも扱いました。

もう少し詳しくこの手法について話したいと思います。このワークがどのようなアイデアや理念に支えられているのかをお話しします。ひとつは集団トラウマの概念、これはトラウマが個人だけでなく社会に影響を与えるということ、そして個人のアイデンティティや集団のアイデンティティ、そして集団が共有するストーリーなどが政治的なことにまで影響をおよぼしていくということです。もうひとつは村本先生のお話にもあった世代間連鎖の概念です。更にこのような集団的なトラウマが私たちの文化アイデンティティに影響を与えること、そして自分が自分に対して抱く感情を非常に左右するということです。加害者というのは、ある特定の民族のなかにあるのではなく、人間は誰もすべてある状況のもとに置かれると、加害者になる可能性があるということです。私は歴史の問題に対する政治的な解決は、私たちが欲望や差別意識などの人間の性質をしっかりと見て、心理的な解決をしていかなければ、政治的な解決をしていくことは出来ないと考えています。とくに私の両親は共産主義を理想とする人たちで、彼らは政治を通して歴史の問題を解決しようと試みてい

たのですが、私はその両親を見て、心理的なことをやっつけていかないと解決しないと思ったのです。

まずHWHの6つのステップを説明したいと思います。1段階目は、まずこうして2つのグループが集まった時、その歴史上で起こった事に関して対話をするということが普段はタブーなわけですが、このタブーを破るという段階です。例えば2つのグループのなかには、暗黙の了解でこのことについて話をしないというタブーがあるのですが、今現在私たちは、ここにこうして集まることによって、そのタブーを破っています。次のステップは、一人ひとりのストーリーに耳を傾けることによって、お互いの人間性を確認する段階です。皆と一緒に時間を過ごすことによって共感する文化を創り上げていきます。お互いのストーリーを聞くことによって、安全や信頼性を築きます。そしてそれが十分に出来た後が3段階で、私たち一人ひとりの全ての人間のなかにある残虐性や加害者になる可能性を見てゆきます。もしかしたら、今回のプログラムのなかの時間では、この3つの段階までは辿り着かないかもしれません。安全や信頼を築くということにとってもたくさんの時間と労力を費やしますので、もしかしたら3つ目の段階にはいかないかもしれません。

4つ目の段階は、深い悲哀を共有するという段階です。私たちは両親や国民のストーリーや悲しみを、意識的にしろ、無意識的にしろ、受け継いでいますので、それを表現するということはとても大切です。5つ目のステップは、このようにして心を開いて湧いてきた感情に、形を与えるというような意味合いを含んでいます。感情を統合するため何らかの形で表現します。これは、最後の日に行われる追悼式やパフォーマンスで表現することで形を与えます。私たちは歴史のトラウマに近づいていくわけですが、その体験に意味を与えるということをしなければ、トラウマに近づいていくことに意味はありません。なぜならそれは、また新たなトラウマになってしまうかもしれないからです。これはとても心理的、そして精



アルマンド・ボルカス 氏

神秘的な作業です。

最後の6つ目のステップはこれらの体験を自分の中で統合して、それからどうするのかということになります。これは例えば美しいものを創る、アート芸術などで感情に形を与えるということや、または、いろんな形での奉仕活動やその他の活動などです。歴史の問題に焦点を当てて「さあ終わったらビールを飲みにいこう」とかそういうのではなくて、その後も自分の中で統合して何らかの形で活動が続くような、これが本当の意味での統合と変容だと思っています。5分話すつもりがすっかり長くなってしまったので、この辺で終わりたいと思います。

## 5 陳新興

---

先生方、皆様、こんにちは。私は南京師範大学で歴史学を学んでおります修士3年生です。ここで皆さんに、2年前に私がこのシンポジウムに参加した時の気持ちを話して、皆さんと分かち合いたいと思います。

2年前、ここで南京大虐殺のシンポジウムということで行われました。11月22日の午前、張先生がご挨拶をされ、村本先生をはじめ、二十数名の研究者の方々と中国の研究者の方々もこのシンポジウムに参加されました。皆さんと一緒に幸存者の証言を聞きました。皆さんの前で証言をすることは、幸存者の方にとっては再び自分の傷口を開けることと同じです。2人の幸存者の方の話を聞いていた時に、皆涙を流しながら、一生懸命に話を聞いていました。しかし幸存者の方にとって必要なものは涙ではなく、同情でもなく、加害者の心からの謝罪なのです。私たちはこれから何を為すべきでしょうか？これはこれから私たちが一緒に考えていくことだと思います。

22日の午後、皆さんと一緒に中華門に見学に行きました。その時、中華門の上に立って風のを聞いていると、まるで戦争当時の情景が目の前に現れているように感じられました。その時に社会科学院のワン・ウェイシン先生が、戦争当時南京を守った時の一番悲惨な場面のことを皆さんに話してくださいました。犠牲になった中国人の兵士の数は数え切れません。私は彼らの魂はまだこの辺りに彷徨っているのではないかと、彼らは正義の声を聞きたいと思っているのではないかと考えています。

中華門を離れて、私たちは民間の戦争資料館に見学に行きました。その資料館の場所は、そんなに目立つところにあるわけではないのですが、中に展示されている資料の数が驚く程たくさんありました。この資料館の中の展示されている写真や資料はとてまたたくさんあり、私が今までに見たことが無いものもたくさんありました。これらの写真によって、歴史的事実が直感的に私に伝わってきました。その時に展示されていた日本軍の軍刀や残虐な場面の数々、また死にかけている南京の方々の情景に、本当に心が痛みました。その時、一緒に来てくださっていた日本の友人の皆様も涙をこらえていたと思いました。

次の日に燕子磯というところにある南京大虐殺記念碑に見学に行きました。燕子磯公園はとても静かでした。揚子江のほとりに被害者の名前が刻まれた慰霊碑が建っています。私は中国人であろうと日本人であろうと、その場を訪れた人は皆心を痛めているのではないだろうかと思います。その時一緒に来てくださっていた日本人の伊東先生と吉村先生が、揚子江の慰霊碑にひざまずいてなかなか立とうとされませんでした。私たちは皆1輪ずつ菊の花を持って慰霊碑に献花し、哀悼の意を捧げました。

私が一番感動したことは中国人も日本人もその時に参加した皆で慰霊碑の傍で慰霊式を行ったということです。日本ではあのような儀式は一番格式の高い儀式であると聞いています。日本の皆さんが慰霊碑を囲んでひざまずいて慰霊している風景を見て、私の心の中にとて暖かいものがこみ上げてきました。私はその時、正義と公正を求めている人は私達中国人だけではなく、たくさん居るのだということを実感しました。日本にも正義感や良心を持って、私たちを応援している人たちがたくさんいるのではないかということを感じました。

私たちは、一緒に努力して中日友好のプロジェクトを前進させていきます。その夜、中日両国の晚餐会が終わってから、私たちはグループに分かれて机を囲み、一緒にこれからのことを語り合いました。その時に皆それぞれ時間をかけて自己紹介をしたのですが、お互いに深く知り合うことが出来ました。その時に分かったのですが、日本から参加して下さっている学者の方は心理学者の方が多くて、歴史学者がとて少なかったことに気がつきました。しかし、こうして皆が集まったきっかけは、皆が歴史に関心を持っているということ

す。この世界では、時間を越えて距離を越えて、皆が一つのことに関心を寄せるといふことがあります。

2007年11月25日は、シンポジウムの最後の日でした。午後に日本からこられた渡辺先生ご夫妻が、ご自分で創られた劇を演じられました。劇の題は「12月の悲哀の南京」という題でした。その劇は華麗な衣装も無く、素晴らしい舞台装置もありませんでしたが、渡辺先生ご夫妻が、素晴らしい真実のこもった劇を見せてくださいました。この劇は始めから終わりまで日本語で、中国語の字幕がついていました。その時、幸存者の方も見に来ていました。幸存者の方は、日本語は全くわからないですし、字幕もよく見えなかったかもしれないのですが、渡辺先生夫妻の素晴らしい演技から伝わってくる心情に、とても感動されたと思いました。私は渡辺先生夫妻の勇気と誠実さにとても感心しました。

渡辺先生のお父様はC級の戦犯です。渡辺先生は、日本が中国に及ぼした加害について深く反省し、中国人に対する気持ちを表されたこともありました。渡辺先生がなさったことは、演劇で表現されていた以上に意義のあることだと思います。2年前のプログラムは4日間で終わってしまいましたが、私にもたらされたものは永遠に残っているというように思います。4日間の間に、私は多くの平和を愛する人たちと出会うことができました。また、彼らの誠実さを私



董天艺 氏(左)、陳新興 氏(右)

は心から称えたいと思っています。私は人々が共に一つのことに関心を向けるならば、一緒に多くのことを成し遂げていけるということを学びました。あのようなプログラムに参加することができたこと、また今日もこうして皆さんとお会いできたことを本当に心からうれしく思っています。皆さんと一緒に今回のプログラムも成功することを願っております。

## 6 董天艺

今回の活動に参加することができるのは、とても嬉しいです。このような活

動に参加するのは、3回目です。最初は、2006年、「香港上海南京3つの地方抗日戦争歴史と教育実地調査団」の一員でした。2回目は、2007年11月「南京記憶」国際学術会議です。

最初の活動は、抗日戦争の遺跡を訪ね、歴史の真相を求めることと言え、2回目と今回は、南京大虐殺と抗日戦争の影響についてもっと深く検討することだと思います。2007年は、南京大虐殺が行われてから70回忌にあたる年です。政府でも民間でも様々な形で追悼記念活動が行われました。このプログラムを通して、私たちはアメリカや日本の研究者と共に南京大虐殺について研究することができましたし、また、私自身の視野を広げることができました。

とても印象に残っている2人の日本人の方がいます。彼らは燕子磯のほとりにある南京大虐殺の記念碑の前で、自分たち独自のやり方で慰霊を行いました。儀式の中で、2人の日本の友人は我慢できず大泣きました。彼らは自分の涙で、戦後世代がその父の世代の犯罪に対して悔やみを表しました。これは、ドイツのブランド元首相が歴史的にひざまずいた行為に相当するものではないが、日本の戦後世代が、半世紀以上前の大災害に対する再考と懺悔を反映するものであると思いました。

過去から現在まで人類の歴史の発展において、暴力と戦争が伴っているということがあります。そして科学技術の進歩は、更に暴力的で残虐な武器を人間にもたらしています。これは人間社会の発展にとって、言葉にならないくらいに皮肉な悲劇です。私は過去の歴史上で行われた虐殺は非常に悪いことであり、歴史の発展上に出た毒の部分ではないかと思っています。南京で行われた虐殺は、人類の根源的なところや文化的なところから自然と出てきた悪の部分ではないかと思っています。

この本能は人間が生まれ持ったもので、人々の潜在意識の中に存在しているものではないかと思っています。例えば現在の社会の中でも、暴力などを始めとした様々な犯罪が起こっています。南京で行われた虐殺は、そのような本能が戦争の中で虐殺という形で現れたのではないかというように考えています。大虐殺は、ある特定の宗教や種族を排除することです。日本は中国を侵略するために中国侵略の暴挙を犯しました。人類が行った暴力行為は、人類自身の産物の一つであると言えます。いったん社会の機能が失われてしまうと、そのよ

うな暴力をコントロールすることができなくなってしまいます。人間がコントロールする力を失うと、他人を侵略する行為をしてしまうことになるのではないかと思います。そのことの代表的な例が戦争です。

人間は誰しも良い面と悪い面の両方の側面を持っています。ご在席の皆さんはたくさん良い面をお持ちですね。しかし普段はあまり見られないのですが、もう一面も持っています。例えば戦時中の兵士は悪い一面が現れた代表例です。彼らが日本に居た時には、優しい父親であり、親孝行な息子であり、人々が尊敬する教師であったかもしれません。しかしそのような彼らがいったん戦争に参加すると、出来るだけ人を殺そうとする別人のようになってしまったのです。人を殺す時、彼らは自分の家庭や自分の人生を忘れ、人間が持つ両側面の悪い方の側面を徹底的に現わしてしまったのです。

彼らの多くは人殺しになりたくないと思っていたかもしれませんが、しかし一旦戦争という場に身をおいてしまうと、悪い方の側面を出すことが正しいことだと思ってしまうような状態になってしまいました。一旦悪い方の側面が正常に見える環境に身を置いてしまうと、人間は正常な判断が出来なくなる程、迷ってしまうのだと思います。彼らが上官の人を殺せという命令に反抗すれば、また彼らも殺されてしまったかもしれません。そのような状況で、彼らは良心に従う対価は良心に従わない対価よりも大きいと判断してしまったのです。そのような状況の下で、兵士の人々は道徳と反対の立場に立ってしまったのです。

戦争が終わって兵士達が平和な日常世界に戻ってからも、戦争によって誘発された彼らの中の暴力性は止むことがありません。一旦自分が暴力を振るう相手を見つけたならば、彼らは暴力性を行動で表わしてしまったのではないかと思います。私はこのような現象は戦争がもたらした後遺症ではないかと思えます。南京大虐殺からもう四半世紀以上が過ぎてしまったのですが、私たちはこの戦争や戦争がもたらした影響について研究し、戦争がもたらしたトラウマを治療する方法を探求しています。

このような研究は「大虐殺を止めることができるのか？」という問いに答えることでもあります。残念なことに虐殺は未だに現代社会のなかでも見られます。人間には、まるでコインの両面のように必ず裏と表があります。ですから、大虐殺が起こる可能性はまだ残っています。イラクのサダム・フセイン大

統領がクルド人を虐殺したことや、アフリカでも虐殺が行われているように、現代でも虐殺はまだ起こっています。私たちはまだまだ虐殺がいつ起こってもおかしくない環境に身を置いています。ですから、私たちが大虐殺を止めるための研究をしていく必要があると思います。

## 17 渡邊佳代

大家好。我叫渡邊佳代。見到大家很高兴。清多多关照。少しだけ中国語を勉強してきました。2年前に「南京を思い起こす」に参加しました。私は今、村本先生の所で臨床心理士の仕事をしています。私自身の背景について少しお話しすると、母方の祖父は満州のハルピンで軍曹をしていました。今お話ししましたが、私の祖父も、私に対してはとても優しい祖父でした。私は、祖父から人を殺した話を聞いていないし、母もまた聞いていませんでした。

2年前にここに来た時、たくさんの写真を見、幸存者の方のお話を聞いてとてもショックでした。でも、心のどこかで、私の祖父はひどいことはしていないと信じきれませんでした。ハルピン出身の学生さんが来られていたのですが、怖くて話しかけることが出来ませんでした。でも、中国の方々からとても温かく迎えてもらって、また絶対に中国に来たいと思っていました。

今、2年前に参加してくださったお二人からも、2年前のことをとてもよく覚えていると言っていただいて、とても嬉しいです。2年前にここに来て、日本に帰ってから、私も母親と祖父が満州で何をしてたかということについて話し合いました。私の家ではその話は一切タブーだったのですけれども、母親も今、祖父が中国で何をしてたのかということについて、やっと考え始めています。祖父がなぜ満州で軍曹になれたのか、またなぜ戦争が終わって日本に帰ってくることができたのか、母も考え始めています。

私の父は、その母方の祖父から、中国で人を殺した話を聞いていました。祖父はなぜ娘である母には話さなくて、血のつながらない父に話したのか、どんな気持ちで死んでいったのか、私も考え始めています。2年前に来た時は、中国で起こったことや日本人が行ったことを受けとめることで精一杯だったのですが、今回は心を開いて皆さんと交流したいと思っています。清多多关照。謝謝大家。

## 8 笠井綾

大家好。我叫笠井綾。笠井綾と申します。ここに来ることができて、本当に嬉しく思っています。2007年に来た時、今まで教科書や政府から間接的にしか得ることが出来なかった歴史、家族からは沈黙を通してしか得ることが出来なかったことを、実際にここで見ることができました。父は戦争の終わる1週間ほど前に中国で生まれていて、引き揚げて来る時の話はとてもよく聞いているのですが、憲兵隊長だった私の祖父が何をしていたのかということについては聞いたことがありません。

私は日本の広島で育ちました。広島はとても平和教育や歴史教育に熱心で、小学校高学年か中学生の時に、南京や中国で日本軍が行ったことについて学びました。それはショックで、私の祖父ももしかしたら中国で人を殺していたかもしれないと思い、私は直接祖父に人を殺したことがあるかと聞いたことがあります。そうすると祖父は「昔のことだから覚えてないな」と言って話をはぐらかしてしまいました。私はどうしても知りたかったので、祖母に聞きました。祖母も「知らない。その話をおじいさんから聞いたことがない」と言いました。今度は父に聞きました。父は「戦争だったから、もしかしたらそういうことがあったかもしれないね」と言いました。

いろんな所からいろんな歴史に関する情報が自分の中に入ってきて、わからなくなり、混乱してしまいました。だから2007年にここに来て、自分の目で見て自分の耳で聞いて本当のことを知る、自分で感じるということはとても貴重で意味のあることでした。

私は、2007年のプログラム後、日本に帰ってから、とても辛い思いをしました。真実をここで学んで日本に帰った時に、自分の中の罪悪感や日本人に対する恥の感覚で心が壊れそうになりました。自分に対する優しさが全部無くなり、消えて無くなりたいという感覚を体験したのです。

私はその時、日本人というのはとても恥や罪悪感を強く感じる文化なので、もしかしたら日本人が歴史を見ることを避ける理由のひとつは、こういった思いをしたくないからかもしれないと思いました。参加する前から、多分そういう気持ちになるだろうなと思っていて、日本にいて考える時よりも、南京で体験する時の方が辛いだろうと想像していました。

でも、私は間違っていました。なぜかというと、自分が自分に優しくなれない時に、私は日本で2007年に中国の皆さんと過ごした時間や皆さんの笑顔を出したのです。皆さんの優しさを思い出すことができたから、自分の負の気持ちや苦しみを深く感じるようになってきたし、またそれを受け入れることができました。だから、南京に来なかったら、皆さんに会わなかったら、自分だけで考えたり、日本人だけで話をしたりしていたら、絶対に行けない心の中の場所に、私は行くことができたと思います。その場所というのは、罪悪感や恥の感覚を深く感じながら、自分や人間に対する愛や希望を同時に両方とも深く感じるようになってきた心の中の場所です。

私はそこにたどり着いた時に、そこがすごく好きでした。私はその場所からしか未来を考えることは出来なかったし、ここから平和が生まれて来るのかなと思いました。その後私は、また南京に帰ってくることを考えたり、計画したりし始めました。その心の中の場所にまた行くことや辛いことを見たり聞いたりすることが怖くなくなったのです。

私はアルマンド先生が言ってくれた6つのステップを行ったり来たりしているところです。これが今までの私の体験です。他の日中の参加者の皆さんは、これからどんな心の旅をするのかなということをとっても知りたいと思います。それをシェアすることでお互いの理解が深まると思います。また、ここで私たちが体験したことを世界とシェアすることで、他の戦争をしている国々や世界のためになることができると私は信じています。

今回はドラマやアートを使ったプロセスを皆とやっとうと思っと思っています。芸術やドラマは言葉にならない気持ちを受け入れたり、表現したりするのにとても最適な手法だと思います。私たちには言葉の壁もありますから、そのためにもとてもいい方法だと思います。4日間、皆さんと一緒に居られることをとても嬉しく思います。ありがとうございます。



笠井綾 氏(左)